

Title	「女は知っている」：エレン・グラスゴー "The past" におけるエンパワメント
Sub Title	"Woman knew" : empowerment in Ellen Glasgow's "The past"
Author	佐藤, 優果(Sato, Yuka)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	2025
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.128, (2025. 6) ,p.152 (9)- 160 (1)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-01280001-0152

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

「女は知っている」

—— エレン・グラスゴー“The Past”におけるエンパワメント

佐藤 優果

はじめに

エレン・グラスゴー（1873–1945）はアメリカ南部ヴァージニア州リッチモンド生まれ、多くの作品を残した女性作家である。リアリズムを志向した彼女の作品はヴァージニアのひとびとの生活史を中心としたものであり、ピューリッツァー賞を受賞した、彼女の最も有名な作品 *Barren Ground*（1925）は、彼女の目指すリアリズムがよく表れた小説として代表的なものと言える。

南部ルネサンスの先駆けとも評されることのあるグラスゴーは、19世紀末からさかんになった女性参政権運動にも携わったフェミニストでもあった。イギリスに滞在した際、女性参政権運動に感銘を受け、アメリカでデモ行進にも加わっていたグラスゴーは、しかし、そうした経験を小説にそのまま詳述してはいない。だが、彼女が残した詩や短編には長編よりも色濃くフェミニズム的思考が反映されていると考えられる。本論では、グラスゴーのこうした経歴を踏まえつつ、1920年発表の短編“The Past”を中心に、グラスゴーのフェミニズム的側面を考える。

グラスゴーとゴシック小説

全部で二十近くある長編小説にくらべ、グラスゴーが残した短編小説は、ゴシック的な装いを持つものが特に多く知られている。“The Shadowy Third”（1916）、“Dare’s Gift”（1917）、“The Past”（1920）、“Whispering Leaves”（1923）、“Jordan’s End”（1923）という5つの短編は1916年から1923年のあいだに書かれている。日本においても2010年以降、これらの短編のうちふたつが翻訳されており、アン

ソロジーに収録される機会も多い。¹グラスゴーが短編において表面的なりアリズムを超えた表現を追求したことは、Edgar McDonaldの指摘にある通りであり(320)、グラスゴーの短編小説群は彼女のキャリアにおいて一定の技法を磨く場であったと言える。

グラスゴーの短編小説はいわゆるEllen Moersが定義するところのフィメール・ゴシックである²と主張するPamela R. Matthewは、グラスゴーが過去を扱う伝統的な手法を利用し、女性をエンパワリングためにテキスト外の過去を用いながら、同時にテキスト内では女性に変化をもたらす作用を現実化することは難しいということを強調していると述べる(107)。つまり、フィメール・ゴシックという18世紀からの歴史ある形式を使い、女性が負ってきた苦難の歴史を透明化せずに作品に書き込みながらも、作品中ですら女性が完全に解放されることの難しさをグラスゴーは認めていたのである。³さらに、Matthewはグラスゴーの小説がゴシックではなくフィメール・ゴシックである重要性を主張する。それは、フィメール・ゴシックではない「ゴシック・フィクションでは混乱した悪夢の幻視が終わったとき、再興を望まれるのは規範的な世界であり、その中で女性主人公は自己嫌悪を強いられる」(109)からである。

グラスゴーは1909年にイギリスを訪れ女性参政権運動を目の当たりにし、その影響もあって帰国後もヴァージニアで参政権に関する活動に携わっている。Barbro Ekmanが定義するグラスゴーの作品が最もフェミニストであった期間は1897年から1913年であり、この事実と重なるところである。しかし、1913年以降に書かれたフィメール・ゴシック的短編もまたエンパワメント性を持つことを本論では提示したい。そこで、1920年に書かれた“The Past”を例に考えていく。

重なり合う女たち

“The Past”はニューヨークにある邸宅を舞台とする。主人公であり、語り手でもあるMiss Wrennは、女主人のMrs. Vanderbridgeと筆跡がよく似ていることから彼女の住み込み秘書となる。ふたりは南部人であるという共通点もあり(119)、信頼関係を築くこととなる。Miss Wrennは、はじめて家に入ったときに感じた違和を物語冒頭で以下のように示している。

I had no sooner entered the house than I knew something was wrong. Though I had never been in so splendid a place before—it was one of those big houses just off Fifth Avenue—I had a suspicion from the first that the magnificence covered a secured disturbance. I was always quick to receive impressions, and when the black iron door swung together behind me, I felt as if I were shut inside a prison. (119)

えも言われぬ影“shadow” (125) が屋敷を覆っているという彼女の直感は的中していた。ある日、夫妻の夕食に招かれたMiss Wrennは、若い女性が扉から入ってくるのを目撃する。夫妻がその女性には声をかけないことをMiss Wrennは不思議に思うが、グレーがかった服を着たその女性から憎しみの感情が放たれていることに気づく。そして、夫は女性に気づかず、妻は気づいていないふりをしていのだということに思い至る。

食事後、怯えて自室に戻ったMiss Wrennの様子を見るようMrs. Vanderbridgeに頼まれたメイドHopkinsとの話で、彼女もまたダイニング・ルームに現れた女性を見ていないことが判明する。Mrs. Vanderbridgeはその女性をthe Other Oneと呼び、そのせいで体調を崩すこともあるのだという。the Other OneがMrs. Vanderbridgeに危害を加えているかどうか聞かれたMiss Wrennは直感的に“I don’t know. Nobody knows—but she is killing her” (129) と考える。

別日、Hopkinsとthe Other Oneについて話していたMiss Wrennは、彼女が“The other Mrs. Vanderbridge” (130)、つまり15年前に死んだMr. Vanderbridgeの元妻であることを知る。Hopkinsは嫉妬ぶかい元妻がMr. Vanderbridgeに取り憑いていると考え、しかしMrs. Vanderbridgeはそのことを夫に言えず、次々と医者にかかるも弱っていくばかりだという。第三者であるがthe Other Oneを目視できているMiss Wrennが力になれるはずというHopkinsの提言もあり、Miss Wrennは幽霊を見たことをMrs. Vanderbridgeに打ち明ける。彼女は夫の精神の中に元妻が居座っているために幽霊が現れると言い、“She is really a thought, you know. She is his thought of her—but he doesn’t know that she is visible to the rest of us” (132) と嘆く。子供がうまれそうになったときに死んだので、自分が元妻の人生を壊した (133) と夫は考えているのである。

本作は、あることがきっかけで終幕に向かう。Miss Wrennはロマンスと冒険

の感覚に動かされながら“a sense of romance and adventure” (135) まがまがしいものを見つける。それを Mr. Vanderbridge と元妻の手紙だと合点した彼女は暖炉の中に葬ろうとする。しかし、Mrs. Vanderbridge はその筆跡が夫のものではない、別の男性のものであることに気づく。元妻が裏切りをはたらいていたという事実を Mr. Vanderbridge に伝えれば彼の心が戻ってくるのではないか——“He will think of her differently” (137) —— と必死になる Miss Wrenn に対し、Mrs. Vanderbridge は夫を目の前に、the Other One に対し赦しの言葉を投げかける。

“I can't fight you that way. . . . After all, you are dead and I am living, and I cannot fight you that way. I give up everything. I give him back to you. Nothing is mine that I cannot win and keep fairly. Nothing is mine that belongs really to you.”

Then, while Mr. Vanderbridge rose, with a start of fear, and came towards her, she bent quickly, and flung the letters into the fire. (138)

Mrs. Vanderbridge が正しい方法で“the right way” (138) the Other One に対峙したのち、邪悪な存在は消えてしまっていたことを語り手 Miss Wrenn は感じる。“She had won, not by resisting, but by accepting; not by violence, but by gentleness; not by grasping, but renouncing. . . . She had changed the thought of the past, in that lay her victory” (139) と Mrs. Vanderbridge の勝利を語る Miss Wrenn だが、にわかにはその瞬間は何が起きたのかその意味を理解できなかったという言葉で小説は幕を閉じる。

“The Past” では、未婚の Miss Wrenn と Mrs. Vanderbridge、二人の妻たちが互いにダブル的存在として登場する。前者の二人は生育環境の類似によって、後者の二人は同じ男と結婚したという意味で彼女たちは重なり合う。Matthew は Mrs. Vanderbridge にとって Miss Wrenn と the Other One はダブル的存在というより“second self”⁴ (132) であり、グラスゴーが Miss Wrenn と Mrs. Vanderbridge のシスターフッドを描きながら同時に加害しようとする元妻の存在を描いたのは、女性の関係を美化しすぎることの馬鹿馬鹿しさに気づいていたからだと主張し、男性という存在によってこそ自己を規定する女性の伝統に向き合った本作は、境界について描いた作品でもあるという (132-33)。結末において、Mrs.

Vanderbridgeは女同士を競争させるような自己規定の方法から抜け出し、すべてを手放そうとする。物語中でほんやりとしたまま幽霊の存在にも気づかなかった夫Mr. Vanderbridgeはまさにその瞬間に“...while Mr. Vandernbridge rose, with a start of fear” (138) 恐怖を感じ、立ち上がる。

Mr. Vanderbridgeは、妻が自分の元妻の幽霊に脅かされていることに気づかない。Miss WrennはMr. Vanderbridgeのフィレンツェ風フレームに入った写真に“An uncanny feeling of familiarity” (121) を覚え、それは先だってコレクション展示を見物したときにあるフィレンツェの高貴な人物の肖像画に感じた“imaginative sadness” (122) と同じだったことに思い当たる。彼と接するうちに、Miss WrennはMr. Vanderbridgeには暴力的なところはなく、妻への愛も十分であることを感じ取り、何がこの夫婦に影を落としているのかと疑問を持つ (124-25)。夫が美術品のコレクションとして展示されているような肖像画と比較される必要があったのは、この物語が個人の過失や束縛を描いているからではなく、女同士を競わせ、“prison” (119) のような家に拘束するという慣習に起因する痛みが描かれているからではないだろうか。伝統という名のもとに、個人という存在は輪郭を失い、家の中に埋もれ、時間を忘れて文字通り死後もその場所に縛りつけられ徘徊することになる。

しかし、牢獄としての家は、Miss Wrennという second self の存在によって解放されることとなる。Miss WrennはMrs. Vanderbridgeにとって何かを決断し、相談するメンターの存在というよりは、秘書という役割で彼女の生活を支え、ともにあることで彼女の決断を導く。彼女はMrs. Vanderbridgeだけが見ていた幽霊を同じように認識し、過去を少しでも精算するために片付けを手伝い、手紙を見つける。

本作では結局、Mrs. Vanderbridgeの元妻への勝利が描かれる。女の連帯が描かれてはいるものの、最終的には結婚という制度は温存され、その結末は女たちのなかで中心的なものにはなっていないように見える。だが、女たちの結びつきが実は依然として力を持っていることをグラスゴーは知っていた。Miss Wrennの前に初めて姿を見せたthe Other Oneは音もなく屋敷のペルシャ絨毯の上に現れ (126)、結末では、“There was nothing there—nothing except the pleasant flicker of light and shadow on the old Persian rug” (139) と、またも古いペルシャ絨毯が登場する。最後に残ったのはMrs. Vanderbridgeの夫への愛のかがやかしい勝利と

いうよりは、女たちのゆるやかでもろい連帯だったのである。家を覆い女たちを取り込む“shadow”は今もお消えないが、心地よい光がゆらめくようになったのだ。

3. 女は知っている —— “The Call”

“The Past”は1920年の作品であるが、本作と共鳴しうるテーマを持つ詩を、グラスゴーは本作の8年前に書いている。それが、“The Call”⁵という詩である。これはグラスゴーが女性参政権運動を促進するために、知人の女性作家に依頼され書いたものである。“Woman call to woman”と何度も繰り返されるその詩は、1912年から13年にかけて複数の雑誌に掲載されることとなった。

この詩では、女たちは身分を問わず男のもとに従属する存在であると描かれる。

Queen of slave or bond or free, we battled,
Bartered not our faith for love or gold;
Man we served, but in the hour of anguish
Woman called to woman as of old. (18–19)

女性たちが詩の中で奉仕し/呼びかけ/知る (serve/call/know) という試みを繰り返すのと対照的に男性たちはその苦勞を見ているだけの存在である。“All the terrors of the chains that bound us /Man has seen, but only woman knew!” (19) 詩はやがて過去の女たちをも呼び覚ます。

Woman knew! Yea, still, and woman knoweth!—
Thick the shadows of our prison lay—
Yet that knowledge in our hearts we treasure
Till the dawning of the perfect day. (19)

“knew”から“knoweth”へと動詞のかたちが過去に重ね合わせるように変化し、女性たちが長い間囚われのうちにいることが示唆される。最後には“Woman calls to woman to awaken! / Woman calls to woman to arise!” (19) と女性同士の呼びかけ

が投げかけられる。

“The Past”とprisonやshadowなどのゴシック的イメージが用いられているという共通点を持つこの詩では、男は女性の苦しみを見ているだけである。“The Past”でも、夫は幽霊という屋敷に起きている問題に気づかず、行動を起こさない。それどころか、彼は“*Oh, he knows she is there, but not in that way. He doesn't know that any one else knows*” (128) と Mrs. Vanderbridge が言うように、妻が元妻を「知っている」ことを「知らない」。詩においては女性の苦しみと連帯を強調する言葉 know は、“The Past”の中では夫の無意識の女を軽視する姿勢として現れる。

男女の行動指針とゴシック的な要素を軸に“The Past”と“The Call”を重ね合わせると、物語における Mrs. Vanderbridge と Miss Wrenn のゆるやかな連帯は、詩の中で強く表現されている、女性参政権運動で女同士が行動し、呼びかけあっていた力強さと共鳴する。さらに、おそらく出産の関係で死亡したことがうかがえる the Other One が夫から解放されるには、Mrs. Vanderbridge と Miss Wrenn ふたりからの眼差しが必要だったと言えるかもしれない。男は幽霊を見ないか、苦しみを見ることしかできないのだ。“The Past”のもつフィメール・ゴシック性に支えられたエンパワメントの力は、“The Call”を通してより明確化されるのである。

おわりに

グラスゴーの長編小説がやや手に取りにくいきらいもあるのか、彼女の作風はゴシックふうだと思われがちである。Patricia Yaeger は南部女性文学の可能性を開くことを試みた *Dirt and Desire* の Prologue で、Susan Goodman によるグラスゴーの伝記を引用し、グラスゴーがその後の南部文学で支配的となる、悲劇的感覚や、深いペシミズム、悪に対する感覚、時間や場所をテーマとすることを決定づけたことを記し、このようなカテゴリにはうんざりだ、といわばアンチ・グラスゴー的な立ち位置から南部女性文学史を語る (8)。このようなグラスゴーの主要なイメージとなっている、いわゆる南部ゴシック的な特徴は、彼女の作品の大多数を占めるリアリズム的な作家性とは相反する部分があるようにも考えられる。

グラスゴーのフェミニズムに対する考え方は実践的な活動をともなう政治的なものというよりも観念的なものであったと言われている。くわえて彼女は、はっ

きりとした理由は特定できないものの、結婚という選択をすることもなかった。ロマンスの情熱からも政治的活動からも逃げ出した(Scura 41)グラスゴーが描き出す女はしかし、自分たちの苦悩を「知っている」のである。そうした姿勢が、1920年以降のリアリズム的長編に結実している、つまり、観念と現実との間に立つ女性たちの生を語り続けているのである。

註

- 1 近刊として利根川真紀編『母娘短編小説集』平凡社（2024）、クリス・ボルディック選『ゴシック短編小説集』春風社（2012）を参照。
- 2 Ellen Moers は *Literally Woman* の中でフィメール・ゴシックを18世紀から女性が書いてきたゴシックと単純に定義づけたあと、メアリ・シェリーが『フランケンシュタイン』でもたらした新しい衝撃から、20世紀に至るカーソン・マッカーズやシルヴィア・プラスまでフィメール・ゴシックが扱ってきたトピックを概観する。
- 3 Monique Parent Frazee はグラスゴーの態度は一見従属的でラディカルなフェミニズムとは相入れないように見えるが、彼女は作品中でユーモアを用いた風刺を行っていると指摘している（187）。
- 4 Matthew がここで second self の概念を、Jean E. Kennard が *Vera Brittain and Winifred Holtby: A Working Partnership* において、表題の二人のフェミニストと作家の関係性を読み解いたものから借用している。Kennard は離れがたい他者としての二人の人間の関係性を、「自己規定の手段としての女性の友情という概念」（1）と説明しており、母娘関係とは異なった自己の確立方法を提示する。ここで、second self は読書という経験によって裏打ちされるものであるとも説明されており（19–20）、Miss Wrenn と Mrs. Vanderbridge の教育環境や筆跡の類似といった共通点においても、彼女たちは第二の自己であり唯一無二の親友である second self という言葉で語られる。
- 5 Julius Rowan Raper によると、1910年にグラスゴーが創設メンバーの一人であった the Equal Suffrage League of Virginia は憲法改正の請願書を州議会に提出した。しかし1912年には女性参政権は否決されてしまい、その後活動は緩やかになってしまった。グラスゴーは女性参政権運動の夜明け“daybreak”（19）をこの詩でうたった。

参考文献

Becker, Allen W. "Ellen Glasgow and the Southern Literary Tradition." *Modern Fiction Studies*, vol. 5, no. 4, 1959, pp. 295–303.

- Ekman, Barbro. *The End of a Legend: Ellen Glasgow's History of Southern Women*. Uppsala, 1979.
- Frazee, Monique Parent. "Ellen Glasgow as Feminist." *Ellen Glasgow: Centennial Essays*. UP of Virginia, 1976, pp.131–66.
- Gardner, Sarah E. *Blood & Irony: Southern White Women's Narratives of the Civil War, 1861-1937*. U of North Carolina P, 2003.
- Glasgow, Ellen. "Jordan's End." *Collected Stories*. Louisiana State UP, 1963, pp. 203–16. 石塚則子訳「ジョーダングズ・エンド」『ゴシック短編小説集』春風社, 2012.
- . "The Call." *Ellen Glasgow's Reasonable Doubts: A Collection of Her Writings*. Edited by Julius Rowan Raper. Louisiana State UP, 1988, pp.18–19.
- . "The Past." *Collected Stories*. Louisiana State UP, 1963, pp. 119–39.
- . "The Shadowy Third." *Collected Stories*. Louisiana State UP, 1963, pp. 52–72. 利根川真紀訳「幻の三人目」『母娘短編小説集』平凡社, 2024.
- . *The Woman Within: An Autobiography*. UP of Virginia, 1994.
- Goodman, Susan. *Ellen Glasgow: A Biography*. John Hopkins UP, 1998.
- Graves, Mark A. "Ellen Glasgow's Gothic Heroes and Monsters." *The Palgrave Handbook of the Southern Gothic*. Palgrave Macmillan UK, 2016, pp.351–63.
- Kennard, Jean E. *Vera Brittain and Winifred Holtby: A Working Partnership*. UP of New England, 1989.
- Macdonald, Edgar. "From Jordan's End to Frenchman's Bend: Ellen Glasgow's Short Stories." *The Mississippi Quarterly*, vol. 49, no. 2, 1996, pp. 319–32.
- Meeker, Richard K. "Introduction." *Collected Stories*. Louisiana State UP, 1963, pp.2–23.
- Raper, Julius Rowan. "Invisible Things: The Short Stories of Ellen Glasgow." *The Southern Literary Journal*, vol. 9, no. 2, 1977, pp. 66–90. *JSTOR*, www.jstor.org/stable/20077562.
- Scura, Dorothy M. "A Knowledge in the Heart: Ellen Glasgow, the Women's Movement, and 'Virginia.'" *American Literary Realism, 1870-1910*, vol. 22, no. 2, 1990, pp. 30–43. *JSTOR*, www.jstor.org/stable/27746392.
- . *Ellen Glasgow: The Contemporary Reviews*. Cambridge UP, 1992.
- Yaeger, Patricia. *Dirt and Desire: Reconstructing Southern Women's Writing, 1930-1990*. U of Chicago P, 2009.
- 相本資子『エレン・グラスゴーの小説群——神話としてのアメリカ南部世界』英宝社, 2005.
- 今井加寿「フェミニズム作家エレン・グラスゴーと女性参政権運動」*Language & literature* (14), 愛知淑徳大学大学院英文学会, 2005, pp.11–19.
- 中道子「エレン・グラスゴー——過渡期の因習を生きる」『現代アメリカ女性作家の深層』ミネルヴァ書房, 1984, pp.1–23.
- 本橋香『エレン・グラスゴーと科学言説——南部ルネサンスの萌芽として』英宝社, 2021.